２０１６年（平成２８年）９月２５日　日曜日
東奥日報新聞　１７面　掲載

秋季県高校野球

第４日

秋季県高校野球選手権大会は第4日の24日、青森市の県営球場で準決勝を行い、八学光星と青森山田が決勝進出と東北大会出場を決めた。八学光星は9年連続20回目、青森山田は2年連続21回目の代表。八学光星は序盤に打線がつながり、終盤に粘りを見せた弘前東を5―4で破った。青森山田は終盤に1年生中澤の本塁打などで突き放し、7―2で弘前工を下した。大会最終日の25日は、県営球場で3位決定戦と決勝を実施。決勝では、3連覇を目指す八学光星と3年ぶりの王座奪還を目指す青森山田が対戦。3位決定戦は弘前東と弘前工の弘前勢同士の戦いとなり、東北大会出場の最後の1枠を争う。（兼平昌寛、斎藤義隆）

きょうの試合

（左のチームが一塁側）

◇県営
▷3位決定戦
弘前東―弘前工（10：00）
▷決勝
八学光星―青森山田（12：30）

光星 1点差逃げ切る

弘東打線 あと1本出ず

【弘前東―八学光星】3回裏、八学光星1死二塁、小池が1打席目に続く三塁打を左越えに放ち、4―0とリード。捕手・藤田陸

【青森山田】打安点振球
赤平 ⑧ 4 0 1 0 0 2
日鳥坂 ⑨ 4 0 1 0 0 0
相部 ⑦ 4 1 1 0 0 0
阿中 ⑧ 4 1 1 0 0 1
斉藤孔 ② 3 1 1 0 2 0
福工 ⑤ 3 0 1 0 1 2
対馬 ③ 3 0 1 1 1 1
犠盗失併残
1 1 0 0 1 2
投手回 打安振球失
対馬 9 37 11 2 1 2

【弘前工】打安点振球
斉藤由 ⑨ 5 1 0 0 0 0
高橋竜 ⑦ 5 4 2 0 0 0
斉藤悠 ⑧ 4 0 0 0 0 0
逢阿保 ④ 4 4 2 2 0 0
木村楓 ① 4 3 2 0 0 1
高田呂 ⑤ 4 2 1 1 0 0
野部凪 ⑥ 4 1 1 0 0 0
岡竹下 ⑤ 3 1 0 0 0 0
士高成 ⑥ 3 1 0 0 0 0
藤木由 ② 2 1 0 0 0 0
犠盗失併残
0 1 3 0 8 3
投手回 打安振球失
斉藤竜 2⅔ 11 2 2 1 2
岡部凪 2⅓ 14 2 2 2 1
工藤 2 11 2 0 1 3

【弘前東】打安点振球
長佐 ⑨ 3 2 0 0 1 0
兵藤 ② 3 1 0 0 0 0
種市 ① 2 1 1 0 0 0
佐々木 ⑥ 2 1 1 0 0 0
坂庭 ④ 2 1 1 0 0 0
小山田 ⑤ 2 0 0 0 0 0
藤島谷 ⑧ 2 0 0 0 0 0
三浦 ③ 2 0 0 0 0 0
上大川 ⑦ 1 0 0 0 0 0
犠盗失併残
3 0 0 1 6 2
投手回 打安振球失
鳥谷部 4 32 8 4 4 2
須藤 4 13 2 1 0 0

【八学光星】打安点振球
馬場 ⑤ 4 0 1 0 0 1
三居田 ④ 4 0 2 1 1 0
花小青 ⑧ 4 0 0 0 0 0
吉成 ⑥ 4 1 1 0 0 1
中摩池 ⑨ 3 1 1 0 0 1
藤田 ① 3 2 2 1 1 0
犠盗失併残
3 2 1 0 6 0
投手回 打安振球
成 9 37 8 4 5 4

▽準決勝（県営）

弘前東	0	0	0	0	0	0	2	0	4
八学光星	0	3	2	0	0	0	0	0	5×5

（弘）鳥谷部、須藤―藤田陸
（八）成田―斉藤
▽三塁打 小池2（八）▽二塁打 桜庭、須藤（弘）

【評】八学光星は粘る弘前東を振り切り、1点差で逃げ切った。八学光星は二回無死二塁から小池の左中間を破る三塁打などで1点差に迫ったが、あと1本が出なかった。

馬場の内野ゴロで2点を加えた。三回にも小池の三塁打などで2点を加点し、試合を優位に進めた。先発成田は直球と変化球を織り交ぜ、弘前東打線を4失点に抑えて完投した。

弘前東は六回に桜庭の中前打などで2点を返し、八回には桜庭の右中間を破る二塁打などで1点差に迫ったが、あと1本が出なかった。

序盤5得点も苦戦

○…八学光星は序盤に5点を奪いながら主導権を握り切れず、弘前東に1点差まで迫られる苦戦を強いられた。仲井監督は、バントミスや守備の乱れなどが目に付いたチームに「経験の無さが中盤以降に出た試合。まだまだ若くて発展途上」と振り返った。

コーナーを突く丁寧な投球で、五回まで被安打1の好投を見せた先発成田は、六回以降一転して安定感を失った。

試合後の成田は「終盤に直球が浮きだして、あの結果です」と反省の表情。仲井監督は「体力のなさを痛感したはず」と話す一方、「最後まで投げ切り勝ったことは彼にとっても大きな財産。東北大会に向けてもいい材料」と評価した。

1点差に迫り手応え

○…夏の県王者・八学光星に1点差に迫り、最後まで苦しめた弘前東。試合後、葛西監督は「勝負どころで、まだ差がある」と話した半面「やれるなぁと思った」と手応えも感じた様子だった。

「中盤までロースコアで持ち込みたかった」（葛西監督）が、主戦鳥谷部が三回までに5点を奪われる展開。流れを変えたのは控え投手の須藤と4番の桜庭だった。

「絶対打ち取る」と強い気持ちでマウンドに向かった軟投派の須藤。直球とスライダーで打者のタイミングをずらし、強打の打線を翻弄（ほんろう）。「存在感を示すことができた」と胸を張った。一方、桜庭は序盤、攻守に集中力を欠く場面があったが、葛西監督に活を入れられ奮起。六回、八回と適時打を放った。試合後は「（八学光星に善戦し）少し自信になった」と表情を緩めた。

東奥日報社提供
この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです